ヲ 6
3206
2

門 ヲ 6
3206
2

昌平坂學問所

西京繁昌記初編下

明治新撰
丹波綾部　増山守正著

大弓

大弓店を播山といひ柴山といひ亀山といひ文山といふ抑弓ハ黄帝の臣揮といふ人始めて之を作り矢ハ同じ世ふ夷牟といふ人之を作るとぞ禮記ハ曰く射ハ者ハ進退周旋必ず禮ハ中る内志正しく外體直くして然して後弓矢を保つ審固ふて弓矢を持つ審固ふして然て後以て中るをいふべしと又曰く射ハ男子の事ふまと古法ハ安土ハ十五間ふしイ一尺二寸の的懸くといふ弓の六分を一人張りといひ一分上りハ一寸を五

ル 4
26385
2

人張りといふとかや我國弓ハ武士道の第一として尊
とゞる中ニ就ては名人ハ義家頼政爲朝宗高等を最と
なす又其中の強弓ハ爲朝ふ一て一寸二分を彎一とい
ふ是定則の七人張りにて振古より比類是れなき強弓
なり宗高の精是も亦源平晴れの戰ひニ海へ馬上で
乘込で扇の要射て落せ古今獨歩の名譽あり武神を総
て弓矢神武士を弓矢の家抔といふも武藝ニ冠たるに
稱といふ〻一其實ハ射を賣るゞゝいふやうな賤一
き業ニ非ざゞ時勢變革輕便の武器様々ニ蜂起せる故
ふ弓矢も相廢ざ次第ふ移る文明ふ戯ざ事ふ歸一終り
遂ニ全く商ふ落つ的ハ尺二の其外ニ中小錯雜金的も

加へて的の數多く中らぞといへ共的へ遠からぞ左を射まい右へ中り大を覘つむ小へ中る反れても中り外れても中る御客の胸の内愉快よ中ヲ繁昌れ的よ中る第一と心を籠めー的の數去ぞ共道へ志氣の矢を折まぞ撓まね勉強れ弓ふ番ふて彎絞り未ざ發たぬ不偏不倚至大至剛ふ躍如多る中うら切て放ーさる其正直れ矢先ふて道の正中理の至極射貫きたる萬物の事、々各々よ感通ー天地位ー萬物も育る中和性情の真面目の標的を失はざるを要をぞー

浮世節

或人曰「チヨンガレ」とい書をぞうらざるの名と或人曰長浮世節といふの義と僕曰く略して浮れ節と稱して可ならんこ然りといへ共長と稱る一理あり其發語ふ於るアーと聲を引く事長きふて知るぞー僕の浮世節と略して世の歌謠の心氣を浮す者れ第一とる者へ凡そ人心を發揚る者千萬是よ過る者ふー其業へ賤の賤ふる者ふーて從來人々席を列るを忌む而ーて明治以來平民ふ列る亦維新の德澤といふぞー其聲を引く長きあり短きあり高低清濁抑揚頓挫悉く其曲節を盡ちぐる無く貴賤貧富老若男女總ーて之を嗜好せざるふー其言極めて猥雜其口最開熱其場中床几を安置ー客の來つて倚るふ任る其他行客イみ聞く是を

聽客進退去來の輕易よ便も其音節の升降妙ふ人を
て感動せしむ是を以て聽客圍擁耳を傾け心醉ふ浮
き節の黨交互來て其錢を收る者幾ど隙かし狡黠の者
あり收る者來きへ去り收る者去れハ又來る去來交互
出沒し遂よ高座より風評せらき赧然紅を潮して去る
又是よ反し故よ豪俠の氣を飾り四五錢或ハ壹朱を與
ふ收る者高く捧げて高座ゑ示も高座の人慇懃之を謝
して聽客よ示も蓋衆の之ふ似る有ん事を振起皷舞も
るあり施主驕氣面よ溢き傲慢三尺鼻高きの狀あり談
者戲言を吐て曰コリヤヤイ鈍太郎汝ハ全體義理知ら
ぜイツゾヤ内へ來と時ふ旦那一生の御願ひでゴザリ

マス二三升御米を借して下さらば直ち算用致しまを
と四升ばかり云ふ故ふ借してやつ多〳〵五升ふもふら
ふかと貸してやつたら六升ふ目ふ逢いしたあ七八
置ても今九升全體汝ハ一斗頃まで待そのおや此様ま
早稲をかゝして催促させる錢おやあ中手も入ぎば
與手らしくヌカス奴と催促ばかりまて是非もふく體一
面五體ぞくめの斷ふて申し米屋の旦那さあ貴君の様
ふサウ天窓からガヱくとオツシヤライでも鬢の分つ
さ噺おや者額や眉毛の借りでいふ現在眼の先ま見
へまゝさ借錢の義でコザリマス私も貴君の御顔を見
る度ふ鼻々迷惑仕り齒々と思ひまゝ喉つとれ間御待

なされて下さらば乳ちつとでも臍をくさと思ひまゝ去
ぎ共私ハ兩手の指の如く家内も大勢の事故脊中ま腹
ハ換つらぎ首ふ掛るやうふ錢設とても能う致しま
せん手足ま任せ拝ぎ出し分釐毫忽文明ふ開化皆納仕
る抔と口から出放題調子ふ乗て佳境ま入り談者錫杖
を振り折らんとし三味線彈き腕を撥ひ落さんとも聽
客我を忘きて忙然たる丁稚も主用を缺き婆も念佛を
忘る傘ハ傘ま中て謝し脚ハ脚を蹈て詫ぶ日漸く沈む
談者殿を停めて聽客ま謝ま聽客離散恰も蜘の子を散
らぎが如く雜遝頓ま寂寥の境ま化し暮風空床を吹く

三級酒樓

三級の酒樓兩所あり萬丸といひ大六といふ亭々衆屋上より突出し東山三十六峰より比叡愛宕は諸山悉く寸眸に歸せざるかし若し夫れ東山月を吐時は則京城十萬家稠密瓦屋恰も波濤の起伏する如く乾坤一碧身は方に舟裏に在るが如くなれて東坡赤壁飄然の觀ふ比を尽き無盡藏真に清風明月は寶ふ價無き遊び樓上千來萬客は新陳交代絶間なく所謂天地は萬物の逆旅光陰は百代の過客を即時席上ふ變化無窮ふ見る如く登り下りは須臾の夢手を拍つ音ハーイーと答る音物を喰ふ音拳を打つ音堺の尻を捫る音笑ふ音怒る音皿を破る音叱る音醉漢の屁を取外る音迄も合せて樓の一

大音聲多所以なり
山海の珍味水陸の奇品備つざる無く設けげる無し肉
ハ林れ如く酒ハ泉の如し手を拍てハ應じ物を命ぜ
ざ成る一も凝滯せる事なし嗚呼都會の自由盛樓の自
在一も我意の如くならざる者なし我意の如くならざ
る者無く去て後我意の如くなるざる者あり我意の如
くならげる者有て後家倉山林田園の我所有ならざる
者あり家倉山林田園の我所有あるざる者有て後自主
自由の權我身の有となるざる者ハり諺ゆいふ奢る者
久しかるざと宜ある哉言や江湖の人希くハ夫れ之を
節みせよ

機開的

半弓肆あり播山といひ金時といふ種々の機關を設て
座興を添ふ其裝置小的多數を懸け中きべ則種々の形
容を現ぜ或ハ忽然天幕中より猪或ハ狸或ハ猫等を落
し來るあり或ハ偶人人力車を挽くハり或ハ踊るあり
或ハ座下凹板樞柱を設け中れべ則旋回せるの機開ハ
或ハ座床迫上る事數尺ある者あり座人慄然色變ず
衆愕然たる嗚呼都會ゆ非んべ此機關を設る能ざ此
機關ゆ非んべ此奇遊を呈せる能ハぜ此奇遊ゆ非んべ
金を得る事多かるべし謂ひつるし商法の機關錢設け
の樞柱産業の迫上を得たるとと

繩伎

繩伎師早綱鯉之助當時最有名ふり數丈竿頭一小横木を貫き此ふ登て伎を施す或ハ一足を横木ふ懸け頭首を都て地ふ向ひ一足ハ横木を離れ斜ふ開て天ふ朝す其危き累卵の如く三味線鼓音其勢を助け看客胸悸膽震ふ或ハ腹心を竿頭ふ貼し身を俛し兩手兩足を放開し恰も龜を抗上ふ置く如く旋轉急回其疾き電の如く看客眼方ふ眩せんとす伎者扇を開て自若ふり或ハ一小木ふ腰尻を安んド長繩を以て之を釣り轆轤を以て高く捲上る事數丈其揺動鞦韆の狀をふし忽然地ふ向ふて墮せんとし急ふ一足を横木ふ繫け頭手倒ふ地ふ向

ひ又一足を入れ替へ優然扇を開て餘地あるを示す想む見る一脚を誤る時い身體粉微塵となつて飛ん事を看客冷汗を流し口を開て瞳焉ゐり嗚呼伎藝世に多し然りといへ共此伎の如く身を百尺竿頭に寄せる危きが如き者あらば此れ危きに比較せば其他の業事何ぞ忌むべき者ならん何ぞ危き者あらんや而して其輕體飛燕の柳ふ戯ふる如く百様千態猿猴且つ及ばざる精鍛熟錬工夫を積む者に非んぞ夫れ誰れか能く是の如くならんや一伎藝さへ猶然り況や聖人の大道を學ふ者を や人にして中心を失へ〻〻繩伎ふも如ぞとせん乎然りといへ共繩伎の術恥脚を失ふ是ば忽ち父母の遺體を

戰〻競〻幾苦
辛不偏不倚最
通神藝精堪感
心堪賤百尺竿
頭寄此身

結句假用古人之句

誤る故ゑ其術れ精ふるい感じて賞を尽く其業の危きハ賤ゝて禁ぜゞ孟子亦曰く其術慎まんバ有るべからゝと宜なる哉言や

癈人

癈人の癈人ある者あり金丸といひ花松といふ金丸ハ陰嚢腫脹其大さ恰も二三斗を入る嚢の如し花松ハ口鼻無くして鼻穴を以て其用を便ぜ水を飲み歌を謠ひ温飩を吸込みポピンを吹等の外別ふ一奇藝あるふ非ぜ唯癈人の極を以て其客を釣るを諺ゑ呼謂治極て亂を生ゝ亂極て治を生ぜゝ僕亦いふ癈人極て糊口を生ぜゝと嗚呼都會ゑ非んゝ此癈を賣り此贅を衒ふて金を得る能ゝ是亦一大繁昌の餘澤トいふ尭き歟

腫大陰嚢兩股間　有鼻無口一平顔
奇哉癈極誇生活　看客如雲錢似山

競市

競市ある者あ衣服骨董の類を衒ふ一人一物を提げ或ハ赤鉢巻をサアナンボ〳〵サア一貫五百サア一貫六百其物を捻りゑ安いちあサア一貫七百と轂を限りふ呼び叫ぶ往還の人一人イみ二人立ち三四五六と聚て漸次ふ群聚利を競ひ勝を爭ひ威氣生ゞ勢ひ付て田舍者滅多無性ふ高價迄調子ゑ乗て競上り羝羊藩ゑ觸き込で接き刺ゝあゝぬ進退ふ我慢の角や懐中の棒を打

物價相爭ふて
意氣豪なり
店頭衒賣す
勵して聲號す
田夫抗抵
如し乘虎に
破竹駸々
到に最高

折り悔といふ

女義太夫

一場あり是は女義太夫の輻湊する所太夫を梅吉花駒初吉琴駒駒吉美駒小仲勝吉常松登女松春松房吉卯の松八重吉小天といふ美人珠簾を捲き上て蛾眉を潛む別品等雲鬢花顏紅粉を粧ひ盡を出談りハ物いふ花ろ諺の天人仙女の降りしう西施も恥て揚貴妃も顏を背ろん其風情三弦取て身を構つ搔き鳴らしたる愛興ハ玉も盈るゝかりなり其標題ハ種々無量一々枚擧そ尽のらぢ武智重次郎出陣ろう寺岡平右衛門の歸國葛の葉の子別は丹波與作の母子は曾我政岡の子を歎

く祖父音近の孫を哀しむ力弥の祝言直實の法心まで
舉ざる無く述ざる無く所謂狂言綺語も讃佛乗の法よ
ち て神祇釋教戀無常何ぞ勸善懲惡の道よ非る者いか
し其高床い樞柱を設け旋轉曲を續ぎ少間斷の無らた
む粧ひ競ふ美女佳人麗服綺羅を輝し金絲銀絲の綈下
し見臺前よ座を占て氣海丹田臍の下心治めて繰り出
す其精妙の音曲ふ看取ぞ聽取ぞ衆客の心和らぎ醉ふ
如く彼の古歌よある天地の心よ叶ふ調ぞおい山の草
木も動くぞかぞ草木さへ動くぞうりれ調づよい人
間何ぞ堪ゆづけん煥文新誌第廿二號ふ掲げある看客
小仲が淨留理と其美色とふ驚き高場より倒墜せしむ

二八佳人三五娘
淨留理海藝林
場抑揚頓挫
張殼色天
外魂飛遊
冶郎

虚假あるゝ俗ハ所謂久米仙も女の脛れ白き見て通を失ふ譬つあり況や凡夫ハ無理からぬ事と思つゝ益もあき者よ醉ふよ文明の學よ醉ちゝん事を乞ふ

於多福店

門帷ハ於多福の面を画き酒食を賣る肆あり俗ハ之をオイシヨと呼ぶ頗る有名の肆店ゝ來客物を命ぜれバオイシヨくと答ふ店大ゝ屋高かゝ質撲古風を存し高名人口ハ膾炙し來客雑遝踵を接ぐ

不與他家爭渭涇　依然存舊門庭
名流何絶淵源在　質撲古風多福亭

花遊軒

花遊軒是ハ一種の酒店ゝ庭園清觀眼を慰め神を樂しむよ足る花遊軒の稱真ハ虚假ゝ食味大ハ佳ハ志て價頗る廉ゝ客去り客來つて綿々絶つゝ手を拍ち物を命して唯諾頻ゝ一醉雅興を取る謂ひつゝ一種の風流店なりと

價廉饌美一名門　調理風流精妙存
珍草奇巖庭上秀　四時真是花遊軒

道場善哉餅

道場善哉餅別種の佳味あるハ非ぞといゝ共其名四方ハ高く諸店を壓倒し遠境僻地の人といゝ共西京ハ來て道場善哉餅を食ハざゝ他の善哉餅を食ふといゝ

共心よ飽かざるが如く飽け共食へばるゞ如し此を以て知るべし道場善哉餅の名遠近よ轟くを此ふ於て田舍人上京すれば必ず食ふ此を以て來客蝟集膝を容き腰を安むる處ふし來客待つ間厭ひつゝ手を拍ち急よ促せば去來奔走左顧右諾婢尻の大あるを恥頰の赤きを蔽ふよ暇あらず其忽忙推して知るべく其繁昌亦推して知るべきあり

善哉商肆最流芳　來客雲蟻少與長
不識道場他有寺　場名如餅餅如場

二ハカ

「二ハカ」ハ俄然頓作の義ふして滑稽落語を以て體とし臨機應變を以て用とす其黨の言ふ曰「二ハカ」ハ庭神樂といふの義ふして古昔天照皇太神天の巖戸ふ隱き玉ひ天地常闇とありし時臼女の尊庭ふ於て神樂を奏し神を凉しめ奉りしふ太神巖戸を開き覗き見玉ひ光輝顯そき面白かりし故事よ因て「二ハカ」といふと未ざ其實是ありや否やを知らず僕親しく此場を見る曲藝數種中ふ就て安達ゞ原三段目の變作あり謙丈を結構と名付け濱夕を馬鹿勇といひ袖萩を土手恥といひ於君を畜みといふ其技の滑稽推して知るべし幸玉富士寶松玉大鶴去ぐれ寶玉橋亀梅蝶といふ者を以て最と奇辨雜言妙よ人をして絶倒せしむ頗方よ機關を脱

せんとして臍將ふ茶を沸さんとす一時の愉快即席の一笑人をして餘念を惹しめず煩惱を起さしめば謂つべし淡泊無毒の一藝と

此是滑稽無盡藏　俄然頭作百機場
一時遊藝十分興　絶倒使人飜笑囊

親玉饅頭

大提燈ふ珠玉を圖し大阪新町出店と書する者を以て招牌とす風味殊に佳ふして價頗る廉平素鬻ぐ所貳厘五厘壹錢の品ふり需に應じて五錢拾錢客の望む所に從ひんといふ是新京極街中饅頭の別品ふして親玉の稱真に虚假ふしばとす

親玉饅頭殊卓然　形容風味着先鞭
傳聞其大從人乞　自二三錢到拾錢

喉藝

丸山新助といふ者あり腫物膿潰後其正に復せざりし乎其原由は分らぬといへ共五軟骨違に氣孔を開き其氣孔ふて多數のポピンを吹き或は筒を水盤中に通じ吹て波瀾を起はしまた或は吹矢を吹き或は吹き玉を吹て上或は口に横笛を吹きあがらポピンを吹く等種々の藝術を行ふ者是を實事ふして決して著者の法螺を吹くに非るふなり

與口與喉一度吹　水筒横笛數玻璃

腫離濃潰偶然孔　生計遂成是亦奇

小鳥の藝

剖葦或ハ鵁白蝶嘴等種々の小鳥を集め教るふ技藝を以てしてしてふ太夫の名を以てして衆客ふ見せしむ其藝の略ヨ曰く少し小高き所ふて張り子の細ユふて小倉ヨ米俵を出を裝置あ是之を去る事四五尺ふして小鳥の籠を開けむ飛で其倉ふ入り張り子の小俵を喙ヨ掛て亂投を介者呼で曰是き太夫此貴寶の者妄ふ亂投ぶ尽くしば數を定めて出せよといふ是より三俵五俵七俵或ハ左り或ハ右と唯介者の命を所ヨ從ふ亦一奇ふり其他張り子の虎或ハ熊ふどを喙頭ヨ掛て左右ハ投げ或ハ高處ふ鐘を設けて之を撞しむ其數亦介者の令ヨ從ふ又百人一首の骨牌を取る亦人の命ぶる所ヨ從ふて百其一を失せば嗚呼知慧ヨ乏しき小鳥ふして人言を以て通ぜざる教を受く妙と言ハざる可んや其黨の言ふ曰く小鳥ぞ能く人の教を聞く猶然り況や人間ふ於てをや人ふして人の教を受け之を習ひ之を覺ふ亦何の難き事ハ是き有んや小學生徒の方々ヨ若し之を能くせぞと云ハば小鳥ふだも如ぞとせん乎真ヨ金言ふり人亦此金言ヨ恥ざる可ん哉

覺數覺方又覺書

的然從命銳堪譽

丈夫修學若無識

當謂小禽曾不如

猫鼠同遊

猫の鼠を嗜好するハ其天性ふ出る者ふして固より論ずるを待ず爰ふ反對の一場あり猫ふ為て數頭の鼠を抱き撫育親愛するの狀あり鼠或ハ猫の背或ハ眉額ふ上るとい〳〵共猫知らざるの狀をふし或ハ之を抱て愛するの態をふし鼠も亦真よ懷けるの風情ありて猫鼠互ふ恬として親和する者の如し是ま元來猫性を恐喝壓制して反對せしむるの習慣ふ出る者ふして奇よ似て奇ふ〳〵ぞとい〳〵共之を推して以て人心の習慣亦善惡の反對ふ分る〳〵を知る〳〵故よ其教慎ぞんバ有るべ〳〵ば楊子逵路を見て哭し墨子練絲を見て泣くと宜ふる哉

猫鼠敵雠皆所知　同遊親睦亦珍奇
人間善惡淵源在　須慎習風為禍基

名鳥樓

名鳥樓と名付るあり俗稱今津久六といふ肆頭小池を設け鴛鴦數頭を游泳せしめ別よ小架を釣り鸚鵡を棲ましめて觀客を惹く鳥獸竝べ畜ふの中鳥特ふ多きふ居る名鳥樓の專稱推して知るべし珍奇數種あ皆其眼目を新ふし其博識を助るふ足る中よ就て珍ある者ハ澳地利亞の岩穴よ住む石鼠ある由一名「カンコロウ」といふと聞く其大さ小犬の如し店奴人ふ指示して立歩

もと説く未だ知らざ是ありや否や又鼠體の普通より大ふして我國の鼬れ大いさの如き者あり是も尾無き鼠ふして支那ふて「モロモット」と稱もといふ又強猪と唱へ其大さ猫の如くふして滿身毛といふて可ふん乎石といふて可ふらん乎其質細小石筆狀の尖刺あり稠密簑毛の如し其動揺抵觸の響ガシヤリ〳〵と音もるを聞く其堅硬推して知るべし一朝怒て其毛を聳かさむ誰か犯す者有らんや真に奇物ふり鳥ふ至ていゑ孔雀ありホロく鳥あり七面鳥ゆふ又「イレコウ」と唱ふ鳥あり其色赤きあり青きあり其間錯の多き六七八色ふ至ふ極めて美鳥ふして其種類頗ふ多し又金鳩あり銀鳩

奇獸珍禽搜索周
籠中自得囀相遊
千聞一見存鴻益
稱號不虛名鳥樓

あり朝鮮鳩あり孔雀鳩あり其類亦多し其他逆毛の鶏あり糸毛の矮鶏あり雉子と鶏の間ふ生ずる鳥あり大海白鳥と唱ふあり水沃鳥と稱ずるあり小判鳥と名付るあり白文鳥と呼ふ者あり其他「キウカン」「バクケン」鳥「シマヒヨヘキ」鳥「キレパラ」や「タウサレジャク」や「タイカレ」鳥「白頭翁」や竹林鳥や其他の奇禽珍鳥枚擧ふ遑有らざるあり

嗚呼都會ふ非んバ何ぞ此奇物を觀るを得んや都會ふ住せざんバ何ぞ此繁昌を記するを得んや然らバ則文ハ則拙しといへ共語ハ固より陋しといへ共亦繁昌記者の列あるを免うまざる所ふして文の拙く語の陋しきハ固より恥るふ遑あらざる所以あり江湖の君子僕の志ふ同じき人此繁昌の遺漏を拾ひ此文ハ不足を補ひて是正を加へ玉ふん事を千萬伏して乞ふといふ

千歳屋緒環蒸

此店緒環蒸を以て高名あり并ふ蕎麥諸品を賣る風味佳ふして價亦廉ふ客來り客去て連綿絶つざるハ方ふ其緒環を廻ふ如く謂ひつべし沽計千歳屋ふ傳ふと

須得緒環風味馨　來賓蝟集滿門庭
左呼右命無遑應　千歳當傳千歳亭

影画

影画ハ暗室の中燈光を以て其形影を映射せしむる者

毫も其彩色を失ふ男女形影左顧右眷或ハ全背を現し或い喜笑の態或い舞蹈の姿百機百出意の如し其他禽獸の狀態花鳥の美麗山水の明媚ふ至るまて精巧其妙を窮め活潑其神ふ入る坐間真ま其物ふ接し其境ふ在るが如く亦一奇あり謂ひつべし是れ亦西京繁昌の影画を寫し出せりと

彩画玲瓏妙入神　變機百出各呈真
西京景況人知否　寫出繁昌餘影新

栗餅曲取

栗餅の曲取と唱ふる場あり一人の男子左手ま搗たる栗餅を握り盆器を去る事一二丈而して捷手其栗餅を

握りて手指間ふて之を分ち團子の編ある様ふ如き大さとあし之を盆中ま拋ち或ハ亂投の間半途の中分れて二つとなりて盆内ニ入り或ハ高く上ニ飛ぶし種々の曲藝を盡して聊粘着の狀なく或ハ二つ或ハ三つ快手之を運ま恰も翩々として胡蝶の舞ふ如く或ハ身を仰き頭を垂ま蜒ま之を投る事連綿蝗の飛ぶが如くふ右て百一を失せざる等の妙藝奇能其曲取りの名稱真ふ虚假あらぬ嗚呼文明の盛ある藝其藝を盡し曲其曲を窮む精煉の苦感ぜぬんば有るへからぬ之ま反ぞる遊客冶郎家業嫌ひの書寢好き懐手して牡丹餅を夢ふ喰ふうつり外ハあく濡ま手で栗ゥ濡れぬ手で栗餅喰ふ

氣取でも此栗餅の曲取の勉強人よ比較せハ月鼈氷炭
提燈と釣鐘程の反對で手持ち無沙汰で尻餅を搗ねバ
あゝ〻身代の長持所ゑ目前ゑ先祖の家業草創も水の
栗餅屁とかつてブスくくと消え失せて消えざる者ハ
不孝の名身上潰し馬鹿者の臭みハ世々よ遺るあり江
湖の君子須く文明の的外さじと凛々惺々引絞る心の
弓ゑ志氣の矢を番ひ放さじ躍如たる騫ぜ崩まぬ滿月
の彼の古句ゑある誰ぜも見よ滿ぜハ頓て缺く月の十
六夜の空や人の世の中あゝ事を氣海丹田臍の下篤と
納めて放ちあハ百發百中狂ひあく道の正的理の至中
何ぞ外ぜの有るざらや之よ反して川柳の本同家後不

和とゑる餅と酒不和を媒して我口へ和睦を謀る餅と
酒雨風ゴザレの下戸上戸附合ひ自慢の喰ひ拔け身上
飲で胃を損し栗餅さへも喰へぞゑり留飲持ちや積氣
持ち醫者へ土持ちぞる勿ぜ

曲技如神精妙存　文明深處轉乾坤
殊驚餅子連投際　半道中分入一盆

寫眞店

寫眞店あり眞影眼を驚し清潔神を爽ゑぞ其種千樣一
あゝ〻ぞ萬態風を異ゑぞ中よ就て青松翠滴らんと欲し
波濤起伏ぞる者ハ山水相映ぞるの寫眞ゑり雲鬢花顏
明眸秋水を凝らし朱唇皓齒活るゑ如く笑ゑゲ如キ者

ハ麗人の寫真ふり堂塔雲霄ふ冲り宮殿林巒ふ出る者ハ神社佛閣の寫真ふり容貌堂々威風凛々俊秀面ふ顯れ或ハ威有て猛かゝざる者ハ英雄豪傑の寫真ふり或ハ甲冑を着ゝ或ハ髻鬟を頂き或ハ婦女の形容を比擬する者ハ俳優の寫真ふり其他鳥獸魚蟲の微より天象地球の大小至る迄寫さゞる無く具ゝさゞる無ゝ抑寫真の妙一寫真影を印を嗚呼文明の進歩精其精を窮め細其細を極む天下の勝景一店ふ聚り古今の英姿一掌ふ會を豈奇と云ハざる可んや豈妙と云ハざる可んや然り而ゝて千歳其芳を慕ひ萬古鬼神を泣ゝむる者ハ徒ふ浮虛の艶色美容ふ非ざゝて唯心上の節操德義ふ因る而已矣是れ忠精義烈家の真影長く世ふ傳ゝ人の賞する所以ふり愼ざる可んや鑒みざる可んや哉

文明開化逐時新　分析存精捕影真
寫取乾坤奇絶景　萬觀收得一場春

演劇

演劇ハ今見る所新京極街中東向きと道場と二場あり俳優人ハ尾上梅朝市川福太郎尾上多三郎坂東芝鬼藏嵐重三郎中村歌之助等を以て最と也外ふ首振りと唱ふる者あり是れ優人故ふ口を噤ド無言ふて其浄留理の曲節ふ從ふて頭頸を振ひ四支を動ゝ飛舞旋轉其態藝を盡す者亦一奇ふり然りとい一共其狀啞ふ類似ゝ

て困悶窮屈隔靴掻痒の歎無きふ非ず因て此ふ贅ぜ必戸外木券を賣り空觀せしめざるの證とし其責る者奴あり婦女ありサアオハイイリヤスくと唯今幕開きサアオハイリヤスくと頻りふ呼て看客を鼓舞せ是ぇ未ざ開らざるも殆ど將ふ開かんとせるの意ふ轉通し既ふ開いて其態藝將ふ終らんとせるも實ふ其幕開きの詞ふ背のぇ蓋し一舉兩得狡黠の呼び聲ふり場の正面舞臺を設け種々の器械を裝置し藝ふ從ふて變化し或ハ樞柱を設け器械旋轉交替忽然一新境を出現し來る場三四尺四方ふ局する恰も碁局狀の如し左右高棚を架し其直下頗る局を高くし觀望ふ便ぜ之を高場といふ高

場の傍舞臺へ通ずる一路あり俗之を花道といふ横ふ引る天幕ハ晴まさるふ何の虹ぞ縱ょ渡しゝる揀ハ雲あらざるふ何の龍ぞ鉤竝づゝる紅燈ハ瑤珞の降ると疑ひ麗人の輻湊ゝるハ天女の會ゝると認む紅粉燦然眼を奪ひ頭飾燒然光輝を發ゝ扇の閃くハ胡蝶の如く笑ひ語るハ花の如し折鳴て幕を開く囃子方三味線を彈き歌を謠ふ看客喧嘩頃ょ止み眼を張て舞臺を覘ふ其眼爛々星の如く所謂鵜の眼鷹の目ゝ狀あり無官太夫敦盛扇屋上總内ふ潛で女樣を爲し小萩と呼ぶ家の娘桂子其實を知て之ょ戀慕ゝ小萩辭して曰く女ふして女を戀ふ知らじ君夫れ閨中を如何んと看客

絶倒ゝ時ふ一人の英傑深編笠ふ面を蔽ひ朱鞘の大小をさし黒羅紗の燕尾皮金襴ふ黒天鵞絨の緑取ゝる野袴を着し來つて陣扇を求る所ゝ捕手來つて敦盛を詮索し小萩を怪しゝ懷ゝ手を入ゝ乳を改んとゝる前の士捕手を投る指を舞せバコロリと翻る二度も舞せバ二度翻る或ハ早る捕手共指も出さぬょ二度翻る手練過たる拍子拔け捕手怒て名乘れといふ彼士然らバ名乘て聞せんと深編笠を脱きふがら四方ょ響く大音聲武藏の國の住人私の黨の旗頭熊谷次郎丹治直實と聞て驚愕ゝる捕手去ゝ共跡ゝ退き難く互ょ詮議爭ひとゝつて熊谷敦盛の詮議受取り上總ょ目禁ゝ敦盛の

首打てといふ詞の下ふ桂子の首身代りよ打ちめて實
検終り両親の愁歎濟で幕とゐ其幕落て加茂川の流
き也清き三十六峰現出し新鮮美觀の景とゐり眼を驚
き大裝置時ふ熊谷郎黨等主人出陣供の為め六具々々
ふ身を固め主の黒馬を牽來る馬ハ男子の両人ゞ馬の
真似して前足とゐり後足も勇しく人よ牽れて前足を
揚げ後足を躍らして頭額を伸つ縮めたり揚々然と出
來る真よ活馬の如くゐり然りといつ共人よして馬態
をゐし心よ之を甘んぜる其微小志ハ賤むべく其文盲
ハ憐むべし人ふして馬態を為ゑ豈人力車牽ふも如ぜ
とせんゐ忽見る直實左右の衣を袒き絞り上ゐる野袴

の紐を解けバ悉く六具よ變ゞ黒馬よ閃りと跨り日の
丸の陣扇開き身構ハゐり此方の敦盛同様ふ左右一度
ふ袒げハ是れ亦緋威鎧よ變ゞ四邉羞明き其風情互よ
威風凛々と再會期して去るで幕

田舎人あり毛氈を見て買えんといふ人其故を問ふ答
ハて曰人切らゑて死ゑ毛氈を以て蔽ハバ生く呪とふ
ゐ手藥とゐゐ手我ゑ毛氈を買歸り土産とゐして故郷
の金瘡で死ぬ人々を助んといふ聞く人抱腹絶倒ゑ

古歌ふ泣ぜして泣く真似ゑふを泣ゐうら泣ぬ顔ゑる
劇場見物と嗚呼男子ふして女様を學び紅粉を粧ひ人
を誑かゑ優人假令婦女子の愛を受ゐ共豈獨内心よ慙

ざらんや之を觀る者は於る亦然り彼の優の男ふして女多〳〵ざるとい明は知て女と認め鬟着て紅粉を塗り眉を画き六七十の老優も少女は化て看客を誑ませをも甘んじて泣きつ笑ひつもする事も忠孝貞烈天性は根ざもといへど到底い狐狸ふ魅せらる如くふて何ぞ聖賢大丈夫嗜好ふもぐき業ふ〳〵んや世上の婦女子優人を愛ぬる正は其父母を慕ふ如く戀着の優人死ぬれば則泫然涕泣恰も其考妣を喪ぬるが如し豈亦之を美とせんや僕竊に思ふ今小學校男女の生員漸次年を經ば劇場の狐狸人民を誑惑ぬるが如きの場たるを知り優人亦文明は化せ〳〵き蓋惡の心を生じ男子の一丈夫ふして

尚も女様をふして彼の所謂泣ぎして泣く真似ぬる詭詐の術をふは慚愧し各自厭倦を生じ漸次觀客減少し優人亦虚戯の業を轉じて實職は就き戯場禁ぜぬして自ら止む時あらん此ふ到て文明更ふ一層の文明を加へ開化又一段の開化を進むる者ふして全國虎飾の人い無く明て目出度新年の春い梅花の玉れ肌雪の中ぬ綻ぶる清き操の馥郁と薫まる枝れ軒端ふハ初音も匂ふ鶯の朝日は窓れ福壽草霞鬟鬟く四方の山鳶も輪をふは長閑ふる空を數千の揚雲雀優しき絲を繰り出ぬ柳の枝ふいらひ氣も直る小風は散る雪を吹れて見ゆる海棠の姿美し夫ぬらも世界ふ比類ふれとい

ふ日本一の櫻花雲か雪かと咲亂れ爛漫ゆるハ實ま花の王といふべき風情かり惜めど限り有る花の彼の古歌ふある惜るゝ時散てさそ世れ中の花も花かう人も人早春過て夏來り雲井名高き時鳥江戸染さへも及ざる杜若ゆも劣らじと紫匂ふ藤の花泥ゆも染ぬ清潔の蓮を心の鏡ふて寫して見せん清水影朝日の樣ま咲く牡丹眠氣の覺る新茶ゆて心養ふ夕涼み既ふ秋の氣立つと見へホロリと落る桐一葉垣根ふ散らぬカら持つ誠咲き立つ舞の庭ふ賑ひ鳴く蟲の散りかゝるも聊も盛り崩さぬ萩の花月ま輝く露の玉玉の數より最多き詩賦文人の月を見て心の錦筆先の花と咲せて東籬ふる菊の清さふ淵明の隱逸心の慕も社て誰ま故郷へ歸る雁早冬枯ま とかりぬまバ木枯し落葉見る毎ま飛花落葉の世を觀ド身も霜雪と消へぬ間ふ切磋琢磨ふ撓ずゞと日本全國遐陬迄爭ひ進む御維新の鴻業成熟遺漏無く善盡き美盡く　王政の大確徴と爲ま可きかな

明治新撰　西京繁昌記初編下　終

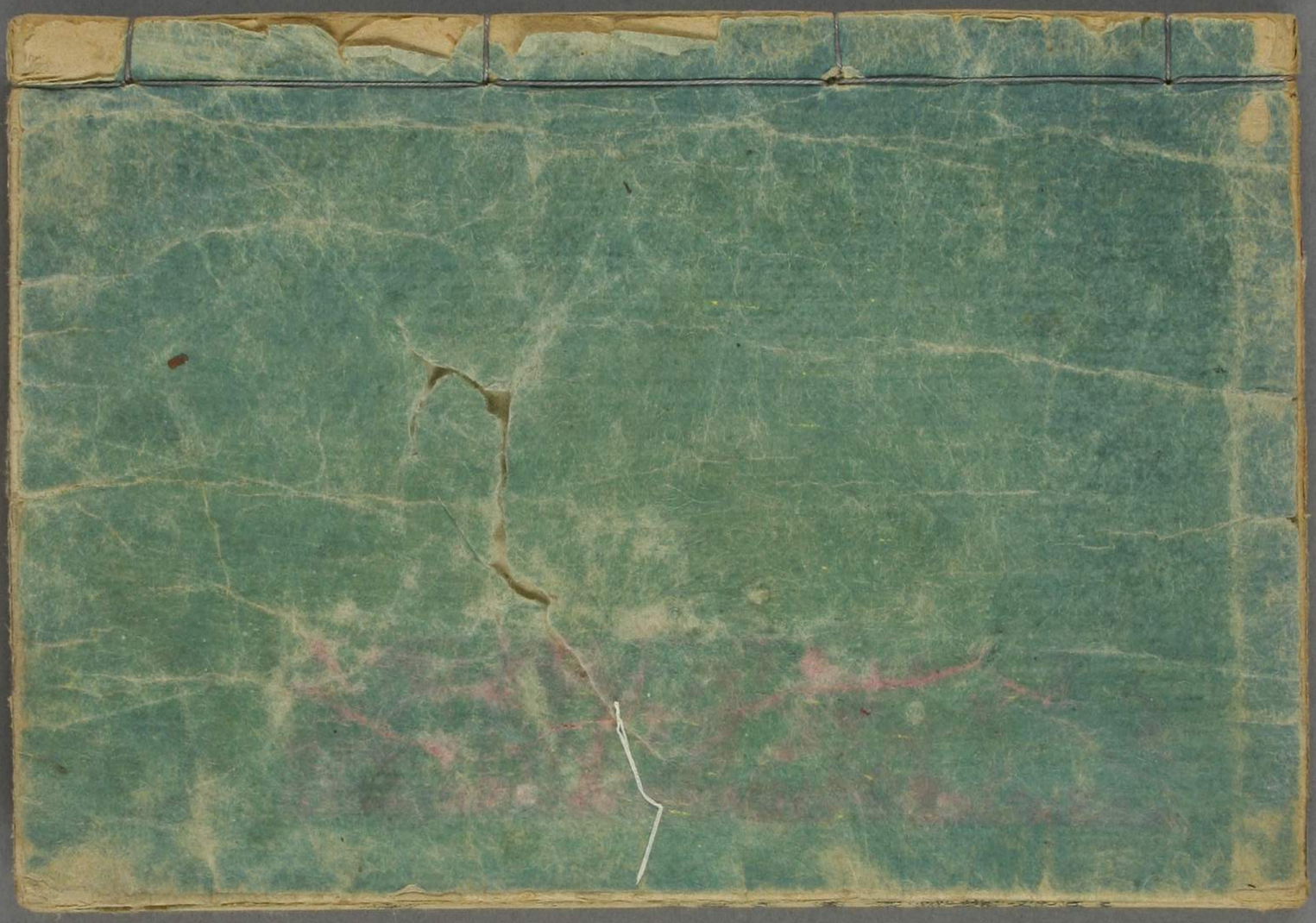
東西々謹て言上仕りまゝ此書の義ハ西京神佛の光榮肆店の隆盛
技藝の精妙を述べまゝたる者ふゝて實ゝ繁昌の海とも山とも
申ゝ盡ゝ難きと増山氏の筆頭小依頼ゝ先づ新京極通りの繁
昌より筆と下ゝ始めますれハ四方の看官愛顧を垂れゝ給ふの
日とりも福井の福德源富めよと汲出ゝ買上げ利益ハ大谷廣
かる程迄仁慈を仰ぎて我迚も已まもと御光車賜ハり或ハ江
湖の登京の人々家郷の土産ゝ購ひ玉ひて四神相應山水明媚の平安
安樂京城城地の富盛の景況一目瞭然歌人ハ居るかゝ名所を知るとハ昔の事
ふて歌人ゝ限らゞ文明世界ハ居るゝ都會と一手ゝ握りて閲ゝ玉へと乞ふ者ハ

京都三條通寺町東入　福井源次郎
同　通御幸町角　大谷仁兵衛

明治九年十二月四日　御届
明治十年三月出板發兌

編輯者　京都府貫屬士族　増山守正　丹波國何鹿郡綾部坪内村五百九十二番地

京都　出板人　京都府下平民　大谷仁兵衛　下京第五區辨慶石町五十六番地

書林　出板人　京都府下平民　福井源次郎　下京第六區石橋町二十番地

書林福井